

## 「ご恩の人生」

産経新聞に、次のような、エッセーが掲載されていました。

いつもは5時前に配達される朝刊が、その日は6時を過ぎても配達されない。そこで退職老人の私は、マンションの玄関付近をウロウロして朝刊を待っていると、見なれないお婆さんが、ようやく配達に来てくれた。

「すみません。息子が高熱で動けないものですから、今朝は私が代わりで・・・」そのお婆さんは、日ごろから配達順序を調べていたのだろう。しかし、どっさりチラシを折り込んだ新聞をかかえながら配達するお婆さんの姿は、気の毒で見られない。そこでヒマな私は、その新聞の束をかかえてマンション内を歩き、お婆さんに配達だけをしてもらった。

「すみません。大助かりです」翌日もまた、お婆さんの配達を手伝った。3日目からは、もとの5時前配達となったが、聞受けに一通の手紙が入っていた。

「母の配達を手伝ってくださってありがとうございます。このご恩は決して忘れません」とあった。

「ご恩」という言葉は、久しく聞いたことがない。だが、まだ「ご恩」という言葉を使う律儀な新聞配達少年がいることを知って、私は目頭が熱くなった。

以上のような大変心温まるお話です。

この筆者が言われるように、たしかに私たちの日常生活から「ご恩」という言葉が聞かれなくなりました。

ところで、この「恩」ということはどういうことでしょうか。

仏教語辞典で調べてみますと「恩とは、私に何がなされ、今の私がこの状態で、ここにある原因は何であるかを心に深く考えること」とありました。

これを私なりに解釈しますと「私が、今の私になるまでに、どれだけ多くの恵みを頂いてきたか、その事をいつも心にとどめておくこと」という事になろうかと思えます。

そこで「私が頂いている恵み」というものを考えてみますと、それは、どこからどこまでと区切ることが出来ないと思えます。

時間的に言えば、無限の過去から現在に至るまでの恵みであり、空間的（横のつながり）に言えば、無限のつながりからの恵みだと思えます。

また、その恵みは人からだけではありません。

空気がなければ生きていけないでしょうし、大地や水や太陽がなければ、お米もとれません。植物が育たなければ大気は炭酸ガスで充満してしまいます。

このように、私たちは直接的に間接的に、ありとあらゆる恵みを頂いているのです。

まさに私たちの人生は、「ご恩の人生」なのです。そして私たちにその目覚めを促して下さるお方が仏さまなのです。

私たちがその事実に目覚めた時、我が日暮しのお粗末なことに深い慚愧の心（恥じる心）が生まれてくると同時に「ご恩の人生」であることに深い喜びが生まれてくるのです。

平成13年10月 「光明寺だより18号」より